



東海教育研究所刊 2420円 (税込)

い頃の思い出話からお願いします。
中洞正 この東京農業大学のキャンパスが私の山地酪農の始まりの場所です。大学二年のときに「映画講演会『山地酪農に挑む』」という小さな看板を目にし、さっそく会場で映画を観ました。その映画は、高知県で急峻な山に牛を放ち、放牧酪農をやっている岡崎正英という先輩酪農家の開拓当初からのドキュメンタリーでした。これこそが本来の日本の酪農ではないかとピンときたのです。そこから今日まで一貫して山地酪農を追い求め、実践してきました。
松井 その映画の監修者が、のちに師と仰ぐ猶原恭爾先生だったそうですね。



酪農家として、従来の常識を覆す二十四時間三六五日の自然放牧を実践してきた中洞正氏と、農薬や化学肥料を用いない自然栽培農法の提唱者で映画『奇跡のリンゴ』のモデルになった木村秋則氏。二人の出会いが三十年ほど前にさかのぼるといふ。中洞氏が培ってきた山地酪農の知見と技術をまとめた『中洞式山地酪農の教科書』の刊行を記念して、二〇二二年七月三十日に東京農業大学で開かれた対談では、二人が互いの歩んできた道を振り返り、来たるべき「楽農新時代」を語り合った。

逆風を浴びて生まれた「内緒の牛乳」

松井久子 本日の司会の松井と申します。さて、本日は中洞さんの古希のお誕生日であり、新著の出版記念の対談を母校で木村秋則さんとされる素晴らしいお祝いの場でもあります。中洞さんの山地酪農、木村さんの自然栽培、それぞれにどのように出会われ、なぜこのお仕事をライフワークにしようと思われたのか。若

中洞 猶原先生はもともと「草の神様」といわれるくらいに植物学者でした。それがなぜ山地酪農の提唱者になったか。植物を社会に役立てるには、酪農が一番いいと考えたからでした。当時は戦後間もない時代で、人々の栄養状態も悪かった。だからこそ、牛を山に放してそこにある植物を活用し、牛乳や牛肉を作り、人々の栄養状態を向上させる。これこそが素晴らしい産業になると考えたのでした。そんな先生の意志を継いで、なんとかここまでやってきました。
松井 大学卒業後、故郷の岩手県岩泉町に入植されたときの苦労話も伺えますか。

中洞 私は一九五二年生まれです。木村さんより三歳若いのですが、大学を卒業して帰郷すると実家は親父が事業に失敗していて、百万円の借金すらできない状況でした。山地酪農をやりたいくても肝心の山がない。山仕事で日銭を稼ぎながら、山の中になんとか五ヘクタールの土地を借り、ジャングルのような山林に有刺鉄線を張って牛を放牧するところから始めました。その後、国の広域開発事業の一環として行われた北上山系総合開発事業による牧場開発地への入植を打診され、一九八四年に三十一歳で入植しました。けれども、そ